

兵庫の美術概観（近代から現代へ兵庫の洋画家たちの私見的概観）

調査研究係 米澤 光治

はじめに

調査研究にあたり兵庫の美術について洋画家たちを通して私見ながら概観を述べたいと思う。この概観の中では官展、在野系、前衛集団など美術団体・作家たちも視野に入れバラエティ豊かな兵庫の美術に少なからず関わりをもつ創元会作家の存在にもふれ本稿で紹介していきたい。

一近代洋画の奇才ー 青山熊治 (1886～1932)

独特の色彩と筆遣い、ダイナミックな構図などで知られる近代洋画の奇才青山がいる。青山は兵庫県朝来市生野町に生まれ、同じ生野町出身の先輩である白瀧幾之助、和田三造の後を追うように1903年(明治36年)から洋画家の高木背水に師事。1907年、東京勸業博覧会に出品した「老坑夫」が二等賞、1910年、第13回白馬会展にて「アイヌ」が白馬賞、同年の第4回文部省美術展覧会(文展)では「九十九里」が三等賞を受賞。翌年の第5回文展で「金仏」(図1)が二等賞となるなど目覚ましい活躍を遂げた。



図1 青山熊治《金仏》

1911年第5回文展 油彩・カンバス

但陽信用金庫ギャラリー蔵

1913年(大正2年)には大連から、シベリアを経てヨーロッパに入り、9年もの間諸国を巡遊して苦学をしながら画技を磨き、帰国後もすぐには展覧会に作品を発表せず、1926年(大正15年)、満を持して発表した大作「高原」が、第7回帝国美術院展(帝展)にて特選と帝国美術院賞を受賞。その後同展審査員を務めた。その後、九州大学工学部の壁画制作に携わって力を注ぎ、完成間近というところの1932年(昭和7年)12月、兄を見舞いに訪れた故郷生野町で急病にかかり、46歳の生涯を終えた。

一日本の風景を描くー 金山平三 (1883～1964)

金山平三は1883(明治16)年兵庫県神戸市に生まれた洋画家である。東京美術学校で黒田清輝に学び、1909(明治42)年、同校を首席で卒業。4年近くにおよぶヨーロッパ留学から帰国後、1916(大正5)年の第10回文展に初入選で特選二席を受賞。以後、帝展で審査員を務めるなど官展を舞台に活躍する。

1964(昭和39)年に没するまで生涯を通じ、日本各地、とりわけ東北地方での制作に時間を割き、「大石田の最上川」(図1)などの優れた風景画を多く残したことで知られている。



図1 金山平三《大石田の最上川》

1948年頃 油彩・カンバス

兵庫県立美術館蔵



図2 金山平三《港》

(1956~60年頃)油彩・カンバス

神戸市立博物館蔵

「港」は昭和30年代のメリケン波止場風景。画面中央に商工会議所（現存せず）、その左に旧水上警察署が描かれている。海や空の、微妙な青や紫に光る様子が、繊細な色彩で表現されている。海を見る人々の、のどかな雰囲気も感じられる。本作と非常によく似た構図のメリケン波止場風景がもう1点あり、兵庫県立美術館に所蔵されている。

また、金山は芝居絵を描くことでも知られているが、タブローの制作に対し芝居絵は、いくら情熱を注いでいるとはいえ、画家自身あくまでも余技ととらえていたようである。その生涯と画業の全体像については、1975(昭和50)年に飛松賞氏による評伝が、また翌76(昭和51)年に作品目録と詳細な年譜を収録した画集が刊行され、いずれも今日に至るまで基礎的文献となっている。

—写実的絵画の巨匠— 小磯良平

(1903~1983)

小磯良平は親しみやすい女性像を中心としながら、西洋絵画の伝統の中に、市

民的でモダンな感覚と気品あふれる画風を完成した画家であった。小磯は、明治36年(1903)、旧三田九鬼藩の旧家で、貿易に携わっていた岸上家の8人兄弟姉妹の次男として、神戸市神戸(現中央区)の中山手通7丁目に生まれた。当時の神戸は、外国貿易の窓口となっていた旧外国人居留地を中心に発展しており、小磯は洋館が立ち並ぶ街で自然に「西洋的な空気」を吸って幼年期を送った。クリスチヤンの家庭で育ち、鉛筆と紙を与えておけば黙々と絵を描いて飽きることがなかったといわれている。

大正11年(1922)、小磯は東京美術学校(現東京芸術大学)の西洋画科に入学し、猪熊弦一郎・岡田謙三・荻須高德ら優秀な同級生と画架を並べることになった。持ち前の実直さで努力を重ねた結果、大正14年の帝展(帝国美術院美術展覧会)に入選を果たし、翌年には「T嬢の像」が特選に輝いた。(図1)



図1 小磯良平《T嬢の像》

大正15年油彩・カンバス

兵庫県立美術館蔵

第4回文部省美術展(第4回新文展)に出品された、「斉唱」は小磯の代表作である。(図2)このころ小磯は新制作派協

会という新進気鋭の美術団体に所属し、人物画を中心に精力的に制作していた。



図2 小磯良平《斉唱》
1941年油彩・カンバス
兵庫県立美術館蔵

しかし一方でその卓越した技術が買われ、軍部から従軍画家として招集され、中国大陸や現在のインドネシアなどに赴き、いわゆる「戦争記録画」を手がけていた。後年小磯はこのことを心苦しく思っていたようである。そうした画家の心情とあわせてこの作品を見てみると、太平洋戦争が勃発する直前という時代背景や、楽譜を手に持ち歌う素足の若き女性たちというモチーフ、白と黒を基調とした抑制された色彩とあいまって、見る人々にさまざまな感情を湧き起こさせる。

戦後は母校である東京芸術大学において後進の育成につとめ、また東京・赤坂の迎賓館のための壁画を制作するなど、この分野における多くの傑作を残し、昭和58(1983)年には文化勲章を受章。昭和63(1988)年、神戸でその生涯を終えた。

—「具体」世界美術史の中の「ニッポンの前衛」—

1954年に吉原治良を中心に関西・阪神間の美術家が集まって結成した「具体美術協会」(具体)は、活動の場であった関西においては、よく知られてきた前衛美術団体である。美術館でもたびたび回顧展が開かれてきた。「具体」は、1972年に解散するまでの18年間、実に多様な活動を行なった。機関誌を発行し、野外や舞台上で作品を見せ、大阪や東京だけでなく、ニューヨーク、トリノ、パリ等、海外でも展示を行なった。現在、世界的に再評価されている。



図1 吉原治良《黒地に赤い円》
1965年アクリル・布、兵庫県立美術館蔵

—兵庫ゆかりの創元会作家たち—

兵庫の創元会は、数十年にわたって開催されている創元展京都巡回展や兵庫巡回展に訪れた評論家、学芸員、美術関係者などから好評を博してきた。

兵庫支部の指導にいられていた深谷徹先生、工藤和男先生ら兵庫にゆかりのある先生方の洒脱で柔らかな感覚や迫真の存在感、重厚なマチエールの作品群が高く評価されている。ここに但陽信用金庫所蔵の創元会作家の収蔵作品を略歴とともに本稿で紹介する。



深谷 徹 《アテネの港》

(1919年～1992年)

但陽信用金庫ギャラリー蔵

前橋市出身。群馬師範学校卒。アカデミー・グラン・シュミエール、スペインのマドリッド美術学校に学ぶ。帰国後、創元会展に出品、同会常任委員。52年日展特選。65年菊華賞。日展評議員。国際具象派美術展にも出品。



工藤 和男 《刻》

但陽信用金庫ギャラリー蔵

- 1933年 大分県に生まれる
- 1965年 日展入選 (以後 23回)
- 1970年 安井賞展出品 (以後 7回)
- 1972年 箱根彫刻の森美術館作品収蔵
- 1973年 昭和会展出品 (以後招待出品2回)

- 1976年 日展特選受賞
 - 1977年 日展無鑑査
 - 1979年 日展特選受賞
 - 1980年 日展委嘱
 - 1990年 山梨県立美術館作品収蔵
 - 1992年 創元会常任理事
 - 1998年 創元会理事長
 - 2014年 創元会会長
- その他 紺綬褒章 4回



米澤 光治 《残照の東部第2工区》

但陽信用金庫ギャラリー蔵

- 1952年 神戸市に生まれる
 - 1991年 創元会展会員新人賞を受賞
 - 1994年 創元会展会員賞を受賞、創元会運営・審査員
 - 1998年 創元会展文部大臣奨励賞を受賞
 - 2003年 芦屋の美術に招待出品
- 芦屋市立美術博物館作品収蔵

引用・参考文献・協力等

- ・『青山熊治展』 姫路市立美術館、2013年
- ・兵庫県立近代美術館 金山平三展 1994年
—金山平三の資料と作品— 江上ゆか
- ・神戸市立小磯良平記念美術館
- ・兵庫県立美術館小磯記念室・金山平三記念室
- ・『具体』—ニッポンの前衛 18年の軌跡展レビュー— 加治屋健司 2012年
- ・但陽信用金庫ギャラリー
- ・芦屋市立美術博物館
- ・協力：日本文教出版